

なな山だより

なな山緑地の会会報 第15号 2009・4

緑地保全の活動ということ

相田幸一

なな山緑地の三番目のエリアが確定した。

2009年3月26日多摩市の担当者3人と「なな山緑地の会」2人の立会いのもと、新しい活動エリアが明確になった。三段階に確保された用地を、仮に呼び名をつけてみた。当初からのエリア1.07ヘクタールを「なな山の森」、続いて加わった0.59ヘクタールを「4本松の森」、今回のエリア0.83ヘクタールを「キツツキの森」とした。もちろん、仮称であるから今後どんな名前になるかは楽しみでもある。ともかく合計2.49ヘクタールという広い面積となったのだ。



「なな山の森」は、昔ながらの雑木林と人との関わり方を、今風に求めながら維持管理しているところだ。

「4本松の森」は、この1年の間、倒木の片付け、枯損木の伐倒片付け、不整形木の伐倒片付け、作業用の道づくりをしながら森の姿を模索してきた。そして見てきたものは、まず片付けにより大きく開かれた中心付近に、これまでドングリから育ててきたクヌギの苗を植林し、クヌギ林をつくることだ。その周辺のドーナツ部分は、この森の半分を占める常緑の広葉樹帯だ。ヒサカキ、シラカシを中心として、その中にイヌツゲ、タブノキ、シロダモ、ユズリハ、更にカクレミノ、ヤツデ、アオキが混じっている。アカマツ、

モミの大木もこの地域に含まれる。この植生を生かした森に手を加えていく。そして、その範囲から外れた部分は落葉樹の混合林として整備する。こんなゾーニングを考えて、これからの活動方針とすることが今年度の総会で同意された。

「キツツキの森」は、隣地との境界が確定されたばかりである。周辺から見る限り、ほとんどが落葉広葉樹で、林床は大人の背よりも高いアズマネザサに覆われ、簡単には人が入り込めない状態となっている。こういうところは、哺乳動物の成育の可能性もあり、アズマネザサの根元には、思いもかけない動植物の生息に出くわすこともあり、今後の粗調査には大きな期待がある。まずは、人が通れる通路をつくり、慎重に作業を進めたい。この藪を構成するアズマネザサも多摩地域ではメカゴづくりの素材である。その籠づくり文化を継承するには不可欠な物で、いまや入手する場所がほとんどないとすれば、この場所に残しておくことはこの森の活動の一つと考えるようなことになるかもしれない。

いずれにしろ、これだけの広さの雑木林の維持管理に携われることは、大変名誉なことでもあり、同時に多摩市民の財産、もっと大きく言えば日本の、地球の自然環境のほんの一部ではあるが、その保全に加われることの意義は大きいと思う。そうは言っても、ボランティアの力はあまりにも小さく、そんな大義はないがしろにされがちだ。しかし、小さな活動を続けていくこと、それも大義は心の隅に留めながら、目の前の現実を大いに楽しみながら活動すること、それこそが将来のための力となっていくのだ。

人類がこの世に生まれて以来、人は他のあらゆる生物とともに、お互いに小さな影響を与えつつこの自然をかたちづくり、維持してきたのだ。私達の活動もその延長線上の小さな働きかけであることは、間違いないと確信している。

(写真) 上 = ゾーニング計画図、下 = 多摩市と境界の確認



平成 20 年度 総会 が 開催 され た



3月22日(日)平成20年度総会が開催された。会場は例年、竜が峰小学校であったが、閉校となったため、今回から百草団地第二集会所になった。9時に開会、出席者は19名、委任状17名を含めて36名で総会は成立、議事に入った。

平成20年度活動報告、会計報告に続いて役員改選は全員留任で承認された。引き続き平成21年度活動計画が発表された。

活動計画は前年の継続だが、今年度から東の山の隣の0.83ヘクタールが活動エリアに加わり、3エリア合わせて約2.5ヘクタールが活動場所となるため、各々のエリアをどのような林にしていこうかというゾーニング計画が提案された。これらについて

住宅に近い樹木は早い時期に萌芽更新して住宅に危険が及ばないようにして欲しい。活動の年間スケジュールを示して欲しい。ツリーハウスを作るのは見合わせて欲しい。など要望があり、夫々対応することとし、活動計画は承認され、続いて21年度予算案が異議なく承認された。会場の都合で時間が不足し、十分討議できなかった件は別の機会に行くこととし、10時に閉会した。

(写真) = 総会の様子

広げよう会員の和

リレー随筆(15)

「なな山」に思う

青木 賢治

それは地下鉄森下駅のホームの壁のポスターからであった。

「あなたは死んだら何をしたいですか？」だったと記憶している。チョット待ってよ、死んだら何も出来ないよ。「定年になったら何をしたいですか？」じゃあないのかな。離れた所から読んだので読み違えたかと思い、電車が来るにはまだ時間があったので近づいて読んででもやはり文面は同じだった。

今まで「定年になったら何をしようか」と漠とは考えていた。何時だったか同僚と酒を飲んでいて、やはりそんな話題になった。その時は「60才で定年になったら家内と一緒に尾瀬にでも行って山小屋に住まわしてもらい、無給でよいから湿原の監視員をやる。毎日野山を歩けば足腰は弱まらないし、自然環境の良い所で働いたら最高だ。夜は小屋の裏庭でゴルフの素振りだ。65才で年金がもらえるようになったら下界に降りて来る。そして好きなゴルフや車で温泉巡りでも楽しみたい。それまでの間、山でも衛星放送があるから競馬の中継は見られるし、今は馬券もPCや電話投票もできる。ゴルフ中継もしかり…」と冗談とも本音ともとれることを言ったが、それも酒の肴に提供したもの。

そうか、確かに死んだら何もできない。生きていうちにやりたいことを一つでもやろう。定年なんか待ってられない！と乗り込んだ地下鉄で心にきめた。

「なな山」のメンバーが活動されているのは、よく車で通りながら窓越しに見ていた。或る休日、家内と歩いてなな山緑地を見にいった。この日は活動日ではないらしく、誰もいなかったが看板や説明板を読んだ。その趣旨に賛同するメンバーを募集をしていることも知った。

次の週の活動日になな山緑地にいった。バンダナを頭に巻いた 相田さんとお会いし、気さくな人柄に親しみを感じ、すぐ仲間に入れてもらうことにした。それは、1年前のちょうど今頃であった。

小春日和の日には、この緑地広場の地面や畑にルリタテハやヒメアカタテハが羽を広げ、越冬の準備が陽を取り込み、ツマグロヒョウモンはコスモスの花に舞っていた。百草団地、高幡台団地や帝京大学に囲まれた多摩の一角のこんな小さな里山の緑地にも蝶の住む自然がまだ残っていると知って嬉しくなり、また学生の頃、採集に熱を入れた蝶、色々なタテハチョウをひさしぶりに見つけて懐かしかった。

これから春にはなな山緑地に自生するカンアオイを食草とする「春の女神」ギフチョウが、夏にはブナ・クヌギの梢に集まる「蝶の宝石」ゼフィルス(シジミチョウの仲間、緑色や青色に輝く)や大きな国蝶オオムラサキ。秋には高尾山や御岳で樹林の間を優雅に舞うアサギマダラが、このなな山でいつか見かけられるかもしれないそんな日を夢見て、残された貴重な「なな山緑地」の自然をいつまでも残していこうと思っている。

さて、次回はいつも美味しいお漬け物を頂いている立見さんをお願いします。どうぞよろしく。



タンポポ キク科

Taraxacum platycarpum Dahlst.

春に最も親しまれている花といっても過言ではないタンポポは、関東地方の野原や道端に生える多年草。葉は食用、根は健胃剤に用いられる。タンポポの花は花びらに見えるが1枚がそれぞれひとつの花。したがって咲き終わると、ひとつひとつが冠毛をつけた種となり飛んで行く。

タンポポの名前が書物に登場するのは江戸時代になってからのことで、それ以前の書物にはない。貝原益軒が『和爾雅』(1688年)で初めて「蒲公英」を「タンポポ」と訓じた。語源については諸説あるが、柳田國男は「鼓」の響きからきたものとしている。花茎を切り取り両端に切り込みを入れて水につけると反り返り、鼓に似た形になるという説もある。福井県には「ツツミグサ」という名前も残っているという。



セイヨウタンポポは繁殖力の旺盛な帰化植物で、日本のタンポポはそれにおされて激減している。セイヨウタンポポは明治の初めに札幌農学校にアメリカ人教師が野菜として持ち込んだものが野生化したといわれている。帰化植物とは、一般的には明治維新(1868年)前後から日本に持ち込まれ、野生化した植物とされている。日本は島国であるため、陸続きの国に比べ帰化植物と断定できるものがはっきりしている。その侵入の主な原因は飼料用輸入穀物で、その中に種子が混在していることによる。帰化植物が起す大きな問題は、在来生物相の攪乱で、特に小さな島ではその影響が著しく、在来の植物を絶滅に追い込む要因にすらなる。



このところ、多摩川の河川敷ではアレチウリが繁殖し大群落となり、灌木を丸ごと覆い尽くしている。アレチウリは北アメリカ原産のつる性の草本。



巻きひげで繁殖し、飼料用畑などにも発生し大問題となっている。逆に日本のクズは、砂漠の緑化に使われたりしているが、国外で大繁殖して問題になったことがある。日本での帰化植物は年間30種類くらいのペースで確認されている。生物多様性の保全にとっては、ゆゆしき問題のようだが、侵入してくる植物の問題をどのように考えたらよいものだろうか…。



〈写真〉= 1.日本のタンポポの総苞は反り返らない。(右上)

- 2.セイヨウタンポポの総苞は外へ反り返る。(左上)
- 3.花茎を切り取り、両端に切り込みを入れて水につけると反り返って鼓に似たような形になる。(右中)
- 4.アレチウリ。なな山の西斜面に生えている。(左下)
- 5.クズ。これもなな山の西斜面に生えている。(右下)

エコ・フェスタ2009に参加

3月28日(土)、29日(日)にパルテノン多摩市民ギャラリーで～地域の視点から・環境～をテーマに市民や学校が取り組んでいる環境保全活動のパネル展示や発表会などが行われた。当会も、パネル展示で参加。子供たちの雑木林観察の写真パネルの他、コナラのプランターや小鳥の巣箱・ヤマザクラの花などを展示し、私たちの活動を紹介した。



〈写真〉= なな山緑地の会の展示コーナー

なな山日記(活動・観察記録)

とたに えま

2009・1・11(日)晴れ 気温7

ご神木の前に道具類を並べて今年の安全を祈願した。参加者21人。
「作業」畑=ダイコンの収穫、後を耕す。クズ掃き全域。下草刈り 広場・住宅付近。東の山 = 倒木整理。刈払い機など機械の整備。シイタケを収穫。
「さえずりの森」のメンバー6名が見学に来る。新年の記念写真撮影



2009・1・25(日)晴れ 気温11

中央公園班の助っ人4名。今日も充実した活動 参加者23人。
「作業」くず掃きが進む。落葉囲いはほぼ満杯、まだ、山のところどころに落葉の山が残る。東の山は作業用の階段と道づくり、倒木の片付け。下草刈りも進んだ。
「観察」見つけた植物 = オオイヌフグリ、タンポポ、ホトケノザ、コウヤボウキの咲きガラ、ヤブコウジ。

2009・2・8(日)晴れ 気温15



新入会員が刈払い機挑戦。シイタケも着々と育っている。「自分も成長しなくちゃ」と思う今日この頃。参加者20人。

「作業」シイタケ収穫、ゾクゾク(写真左)、下草刈り、落ち葉集め一部は住崎農場へ、東の山の道作り、倒木片付け、薪割り。アオゲラが昼に飛来。東の山に巣があるのかな？

2009・2・22(日)晴れ 気温13

本日はメンテナンスデー(片付けは毎回)、お昼はお味噌汁。参加者17人。
「作業」柵の修理、畑 = 耕耘機かけ・畝作り、東の山 = 道作り、倒木整理。西の谷 = 側溝掃除、落ち枝片付け、チェーンソー整備、熊手修理、薪割り。
「観察」見つけた植物 = ウメ、ウグイスカグラ、ヒメオドリコソウ、スイセン。



2009・3・8(日)曇り 気温11 寒い

色々な世代交代(ホダ木作り、クヌギ苗、階段)。参加者21人。
「作業」東の谷の落葉集め、落葉囲いに入れる。新しいホダ木にシイタケ・ナメコの駒を打つ(写真右)、クヌギの苗を掘り起こす、階段の修理、薪割り、プランター作りなど。
「観察」見つけた植物 = モミジイチゴ、カンスゲ、ダイコンソウ、キノコ。

2009・3・22(日)小雨強風 気温15

総会無事終わる。西の山にシュンラン続々、不安定な天気のため活動は午前のみ。参加者18人。



9時から百草団地集会所で総会を開催、21年度の活動方針・予算など決定、また4月から東の山の隣の0.83haの新たなエリアが加わるので、3つのエリアのゾーニング計画が発表された。総会終了後、活動を開始。曇りで小雨まじりの天気ながら参加者はやる気充分!

「作業」東の山の中心に、畑の横で育てたクヌギの苗を植える予定なので、場所を片付けて、植える位置を示す杭うちをする(写真左)約20本。丸太製の椅子が大分古くなっているので、切り口を切りなおす。また、シイタケが沢山発生した。住崎さんから頂いたホーレンソウと共に良いお土産になる。昼食をしているうちに雨が降り始め、風が強くなったので午後の作業は残念ながら中止となる。

なな山だより 第15号
発行
発行責任者
住所
ホームページ
編集委員

平成21年4月12日発行
なな山緑地の会
高木直樹
多摩市和田1394 13
<http://www.geocities.jp/nanayamaryokuchi/>
鎌田文雄・中原君代・戸谷恵麻

編集後記

新年度がはじまりました。今年度はさらに東側の0.83ヘクタールも活動エリアに加わりました。3エリア合せて約2.5haの雑木林を維持・管理することになり、私たちの責任も大変重くなります。全員で力を合せて取り組みましょう。 K